

若菜集

島崎藤村

青空文庫

こゝろなきうたのしらべは
ひとふさのぶだうのごとし
なさけあるてにもつまれて
あたゝかきさけとなるらむ

ぶだうだなふかくかゝれる
むらさきのそれにあらねど
こゝろあるひとのなさけに
かげにおくふさのみつよつ

そはうたのわかきゆゑなり
あぢはひもいろもあさくて
おほかたはかみてすつべき
うたゝねのゆめのそらごと

一 秋の思

秋

秋は来ぬき

秋は来ぬ

一ひとは葉は花は露ありて

風の来て弾ひく琴の音に

青ぶどうき葡萄は紫の

自然の酒とかはりけり

秋は来ぬ

秋は来ぬ

おくれさきだつ秋草もあきぐさ
 みな夕霜のおきどころゆふしも
 笑ひの酒を悲みの
 盃さかづきにこそつぐべけれ

秋は来ぬ

秋は来ぬ

くさきも紅葉するものをもみぢ
 たれかは秋に酔はざらめ
 智恵ちえあり顔のさみしさに
 君笛を吹けわれはうたはむ

初恋

まだあげ初そめし前まへ髪がみの

林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に
人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの
その髪の毛にかゝるとき
たのしき恋の盃を
君が情に酌みしかな

林檎畑の樹の下に

おのづからなる細道^{ほそみち}は
 誰^たが踏みそめしかたみぞと
 問ひたまふこそこひしけれ

狐のわざ

庭にかくるゝ小狐の
 人なきときに夜^{よる}いでて
 秋の葡萄の樹の影に
 しのびてぬすむつゆのふさ

恋は狐にあらねども
 君は葡萄にあらねども
 人しれずこそ忍びいで
 君をぬすめる吾心^{わが}

髪を洗へば

髪を洗へば紫の

小草をくさのまへに色みえて足をあぐれば花鳥はなとりのわれしたがに随ふ風情ふぜいあり目にながむれば彩雲あやぐものまきてはひらく絵巻物えまきもの手にとる酒は美酒うまざけの若うれひき愁うれひをたふめり耳をたつれば歌神うたがみのきたりて玉たまの簫ふえを吹き

口をひらけばうたびとの
一ふしわれはこひうたふ

あゝかくまでにあやしくも
熱きこゝろのわれなれど
われをし君のこひしたふ
その涙にはおよばじな

君がこゝろは

君がこゝろは蟋蟀こほろぎの

風にさそはれ鳴くごとく

朝影あさかげ清き花草はなぐさに

惜をしき涙をそぐらむ

それかきならず 玉琴たまごことの

一つの糸のさはりさへ

君がこゝろにかぎりなき

しらべとこそはきこゆめれ

あゝなどかくは触れやすき

君が優しき心もて

かくばかりなる吾わがこひに

触れたまはぬぞ恨うらみなる

傘かさのうち

二人ふたりしてさす 一ひとはり張はりの

傘かさに姿をつゝむとも

情なさけの雨のふりしきり

かわく間まもなきたもとかな

顔と顔とをうちよせて

あゆむとすればなつかしや

梅ばい花かの油くろ黒かみ髪の

乱にほれて匂にほふ傘のうち

恋ひとのあめ一ひと雨あめぬれまさり

ぬれてこひしき夢まの間まや

染もめてぞ燃もゆる紅もみ絹うらの

雨のになやめる足まとひ

歌うたふをきけば梅う川めよ

しばし情なさけを捨てよかし

いづこも恋たはぶに戯はぶれて

それ忠兵衛ちゆうべえの夢がたり

こひしき雨よふらばふれ

秋の入日の照りそひて

傘の涙を乾ほさぬ間まに

手に手をとりにて行きて帰らじ

秋に隠れて

わが手に植うゑし白菊の

おのづからなる時くれれば

一もと花の暮ゆふぐれ陰かげに

秋に隠かくれて窓にさくなり

知るや君

こゝろもあらぬ秋鳥あきどりの

声にもれくる一ふしを

知るや君

深くも澄すめる朝潮あさしほの

底にかくるゝ真珠しらのたまを

知るや君

あやめもしらぬやみの夜に

静しづかにうごく星くづを

知るや君

まだ弾ひきも見ぬをとめこの

胸ねにひそめる琴の音を

知るや君

秋風の歌

さびしさはいつともわかぬ山里に

尾花みだれて秋かぜぞふく

しづかにきたる秋風の

西の海より吹き起り

舞ひたちさわぐ白雲しらくもの

飛びて行くへも見ゆるかな

ゆふかけ暮影 高く秋は黄の

きりこずゑ桐の梢の琴の音ねに

そのおとなひを聞くときは

風のきたると知られけり

ゆふべ 西風にししかぜ 吹き落ちて

あさ秋の葉の窓に入り

あさ秋風の吹きよせて

ゆふべの鶉巢うづらに隠かくる

ふりさけ見れば 青山あをやまも

色はもみぢに染めかへて

霜葉しもばをかへす秋風の

空そらの明鏡かがみにあらはれぬ

清すがしいかなや西風の

まづ秋の葉を吹けるとき

さびしいかなや秋風の

かのもみぢ葉ばにきたるとき

道を伝ふる婆羅門の

西に東に散るごとく

吹き漂蕩す秋風に

飄り行く木の葉かな

朝羽うちふる鷺鷹の

明闇天をゆくごとく

いたくも吹ける秋風の

羽に声あり力あり

見ればかしこし西風の

山の木の葉をはらふとき

悲しいかなや秋風の

秋の百葉を落すとき

人は利劍つるぎを振ふるへども

げにかぞふればかぎりあり

舌とぎよは時世ときよをのゝしるも

声はたちまち滅めぶめり

高くも烈はげし野も山も

息いぶき吹まどはす秋風よ

世をかれ／＼となすまでは

吹きも休やむべきけはひなし

あゝうらさびし天地あめつちの

壺つぼの中うちなる秋の日や

落葉ひるがへと共に飄ひるがへる

風ゆくへの行衛ゆくへを誰か知る

雲のゆくへ

庭にたちいでたゞひとり

秋しゅうかいどう海棠の花を分け

空ながむれば行く雲の

更さらに秘密ひみつを聞きくかな

小詩二首

一

ゆふぐれしづかに

ゆめみんとて

よのわづらひより

しばしのがる

きみよりほかには

しるものなき

花かげにゆきて

こひを泣きぬ

すぎこしゆめぢを

おもひみるに

こひこそつみなれ

つみこそこひ

いのりもつとめも

このつみゆる

たのしきそのへと

われはゆかじ

なつかしき君と

てをたづさへ

くらしき冥府よみまでも

かけりゆかん

二

しづかにてらせる

月のひかりの

などか絶間なく

ものおもはする

さやけきそのかげ

こゑはななくとも

みるひとの胸に

忍び入るなり

なさけは説くとも

なさけをしらぬ

うきよのほかにも

朽ちゆくわがみ

あかさぬおもひと

この月かげと

いづれか声なき

いづれかなしき

強敵

一つの花に蝶と蜘蛛

ちようくも

小蜘蛛は花を守り顔まも

小蝶は花に酔ひ顔に

舞へどもくすべぞなき

花は小蜘蛛のためならば

小蝶の舞をいかにせむまひ

花は小蝶のためならば

小蜘蛛の糸をいかにせむ

やがて一つの花散りて

小蜘蛛はそこに眠れども

羽翼つばさも軽き小蝶こそ

いづこともなくうせにけれ

別離

人妻をしたへる男の山に登り其
 女の家を望み見てうたへるうた

誰かたれとゞめん旅人たびびとの

あすは雲間くもまに隠るゝを

誰か聞くらん旅人の

あすは別れと告げましを

清き恋きよとや片し貝かたがひ

われのみものを思ふより

恋はあふれて濁にごるとも

君に涙をかけましを

人妻ひとつま恋ふる悲しさを

君がなさけに知りもせば

せめてはわれを罪人つみびとと

呼びたまふこそうれしけれ

あやめもしらぬ憂うしや身は

くるしきこひの牢獄ひとやより

罪の鞭責しもとをのがれいで

こひて死ななんと思ふなり

誰たれかは花をたづねざる

誰かは色彩いろに迷はざる

誰かは前にさける見て

花を摘つまんと思はざる

恋の花にも戯たはむるゝ

嫉妬ねたみの蝶ちようの身ぞつらき

二つの羽はねもをれく〜て
 翼つばさの色はあせにけり

人の命を春の夜の

夢といふこそうれしけれ

夢よりもいや〜深き

われに思ひのあるものを

梅の花さくころほひは

蓮はすさかばやと思ひわび

蓮の花さくころほひは

萩はぎさかばやと思ふかな

待つまも早く秋は来きて

わが踏む道に萩さけど

濁^{にご}りて待^{まち}てる吾^{わが}恋^{こひ}は
清^{うらみ}き怨^{うらみ}となり^{なり}にけり

望郷

寺^{てら}をのがれいでたる僧^{そう}のうたひ
しそのうた

いざさらば

これ^{これ}をこの世^よのわかれぞと
のがれいでては住^すみなれし
御^み寺^{てら}の蔵^{くら}裏^りの白^{しろ}壁^{かべ}の
眼^{まなこ}にもふたたび見^みゆるかな

いざさらば

住^すめば仏^{ぶつ}のやどりさへ

ほのほ
火炎の宅いへとなるものを
なぐさめもなき心より
流れて落つる涙かな

いざさらば

心の油濁るとも

ともしびたかくかきおこし

なさけは熱くもゆる火の

こひしき塵ちりにわれは焼けなむ

二 六人の処女をとめ

おえふ

処女をとめぞ経へぬるおほかたの
われは夢路ゆめぢを越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山やま河かはをながむれば

水静みづじづかなる江戸川の

ながれの岸にうまれいで

岸の桜はなの花影かげに

われは処女をとめとなりけり

都みやこどり 鳥う 浮く大川に
 流れてそゝぐ川かはぞひ 添ひ の
 白しろすみれ 堇わかくさ さく若草に
 夢多かりし吾身わが かな

雲むらさきの九重ここのへ の
 大宮内につかへして
 清涼せいりようでん 殿でん の春の夜よ の
 月の光に照らされつ

雲ちりばなみ を彫ほ め濤なみ を刻き り
 霞かすみ をうかべ日ひ をまねく
 玉うてな の台おほしま の欄らん 干か に
 かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の
耀かがやくさまを目にも見て

ときめきたまふさま／＼の
ひとりのころもの香かをかげり

きらめき初そむる暁あかほし星の

あしたの空に動くごと

あたりの光きゆるまで

さかえの人のさまも見き

天あまつみそらを渡る日の

影かたぶけるごとくにて

名なの夕暮に消えて行く

秀ひいでし人の末路はても見き

春しづかなる御園生の
 花に隠れて人を哭き
 秋のひかりの窓に倚り
 夕雲とほき友を恋ふ

ひとりの姉をうしなひて
 大宮内の門を出で
 けふ江戸川に来て見れば
 秋はさみしきながめかな

桜の霜葉黄に落ちて
 ゆきてかへらぬ江戸川や
 流れゆく水静かにて
 あゆみは遅きわがおもひ

おのれも知らず世を経れば
若き命に堪へかねて

岸のほとりの草を藉き
微笑みて泣く吾身かな

おきぬ

みそらをかける猛鷲の

人の処女の身に落ちて

花の姿に宿かれば

風雨に渴き雲に饑ゑ

天翅るべき術をのみ

願ふ心のなかれとて

黒髪長き吾身こそ

うまれながらの盲目なれ
めしひ

芙蓉を前の身とすれば
ふよう さぎ

泪は秋の花の露
なみだ

小琴を前の身とすれば
をこと さぎ

愁は細き糸の音
うれひ

いま前の世は鷺の身の
さぎ

処女にあまる羽翼かな
つばさ

あゝあるときは吾心

あらゆるものをなげうちて

世はあぢきなき浅茅生の
あさぢふ

茂れる宿と思ひなし
やど

身は術もなき蟋蟀の
すべ こほろぎ

夜の野草にはひめぐり
よるのくさ

たゞいたづらに音をたてて
うたをうたふと思ふかな

色にわが身をあたふれば

処女のこゝろ鳥となり

恋に心をあたふれば

鳥の姿は処女にて

処女ながらも空の鳥

猛鷲ながら人の身の

天と地とに迷ひある

身の定めこそ悲しけれ

おさよ

潮さみしき荒磯の

巖いはかげ陰われは生れけり

あしたゆふべの白駒しろこまと
故郷ふるさと遠きものおもひ

をかしくものに狂へりと
われをいふらし世のひとの

げに狂はしの身なるべき
この年までの処女をとめとは

うれひは深く手もたゆく
むすぼほれたるわが思おもひ

流れて熱あつきわがなみだ

やすむときなきわがこゝろ

乱みだれてものに狂ひよる

心を笛ねの音に吹かん

笛をとる手は火にもえて

うちふるひけり十とをの指

音ねにこそ渴かわけ口唇くちびるの

笛たうを尋たづぬる風情ふぜいあり

はげしく深きためいきに

笛をだけの小竹や曇るらん

髪は乱れて落つるとも

まづ吹き入るゝ氣息を聴け

力をこめし一ふしに

黄楊つげのさし櫛ぐし落ちてけり

吹けば流るゝ流るれば

笛吹き洗ふわが涙

短き笛ふしの節まの間も

長き思おもひのなからずや

七しちつの情声こころを得て

音ねをこそきかめ歌うた神がみも

われ喜よろこびを吹くときは

鳥も梢こずえに音ねをとゞめ

怒いかりをわれの吹くときは
瀬せを行く魚も淵ふちにあり

われ哀かなしみを吹くときは
獅子ししも涙をそゞぐらむ

われ楽たのしみを吹くときは
虫も鳴く音ねをやめつらむ

愛のこゝろを吹くときは
流るゝ水のたち帰り

悪にくみをわれの吹くときは

散り行く花も止りてとどま

愆よくおもひの思を吹くときは

心の闇やみの響ひびきあり

うたへ浮世うきよの一ふしは

笛の夢路ゆめぢのものぐるひ

くるしむなかれ吾友わがよ

しばしは笛ねの音ねに帰れ

落つる涙をぬぐひきて

静かにきゝね吾笛を

おくめ

こひしきまゝに家を出で

こゝの岸よりかの岸へ

越えましものと来て見れば

千鳥鳴くなり夕まぐれ

こひには親も捨てはてて

やむよしもなき胸の火や

鬢びんの毛を吹く河風よ

せめてあはれと思へかし

河波かはなみ暗く瀬を早み

流れて巖いはに砕くだくるも

君を思へば絶間なき

恋の火炎ほのほに乾かわくべし

きのふの雨の小休をやみなく

水嵩みかさや高くまさるとも

よひくになくわがこひの

涙の滝におよばじな

しりたまはずやわがこひは

花鳥はなとりの絵にあらじかし

空鏡かがみの印象かたち砂の文字

梢の風の音にあらじ

しりたまはずやわがこひは

雄々ををしき君の手に触れて

嗚呼ああ口紅くちべにをその口に

君にうつさでやむべきや

恋は吾身の社やしろにて

君は社の神なれば

君の祭壇つくゑの上ならで

なににいのちを捧たぐげまし

砕くだかば砕け河波かはなみよ

われに命はあるものを

河波高く泳ぎ行き

ひとりの神にこがれなん

心のみかは手も足も

吾身はすべて火炎ほのほなり

思ひ乱れて嗚呼恋の

千筋ちすぢの髪かみの波なみに流るゝ

おつた

花灰ほの見ゆる春の夜の

すがたに似たるわがいのち吾命

おぼろおぼろちちははに父母は

二つの影と消えうせて

世に孤みなしご児の吾身こそ

影より出でし影なれや

たすけもあらぬ今は身は

若きひじり聖に救はれて

人なつかしきまへがみ前髪の

処女をとめとこそはなりにけれ

若きひじり聖ののたまはく

時をし待たむ君ならば

かの柿の実をとるなかれ

かくいひたまふうれしさに

ことしの秋もはや深し

まづその秋を見よやとて

聖に柿をすゝむれば

その口唇くちびるにふれたまひ

かくも色よき柿ならば

などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく

人の命の惜をしからば

嗚呼あゝかの酒を飲あむなかれ

かくいひたまふうれしさに

酒なぐさめの一つなり

まづその春を見よやとて

聖に酒をすゝむれば

夢の心地に酔ひたまひ

かくも楽しき酒ならば

などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく

道行き急ぐ君ならば

迷ひの歌をきくなかれ

かくいひたまふうれしさに

歌も心の姿なり

まづその声をきけやとて

一ふしうたひいでければ

聖は魂たまも酔ひたまひ

かくも楽しき歌ならば

などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく

まことをさぐる吾身なり

道の迷まよひとなるなかれ

かくいひたまふうれしさに

なごけ
情も道の一つなり

かゝる思おもひを見よやとて

わがこの胸に指ぎせば

聖は早く恋ひわたり

かくも楽しき恋ならば

などかは早くわれに告げこぬ

それ秋の日の夕まぐれ

そゞろあるきのこゝろなく

ふと目に入るを手にとれば

雪より白き小石なり

若き聖ののたまはく

智恵の石とやこれぞこの

あまりに惜しき色なれば

人に隠して今も放^{はな}たじ

おきく

くろかみながく

やはらかき

をんなごころを

たれかする

をとこのかたる

ことのはを

まこととおもふ

ことなかれ

をとめごころの

あさくのみ

いひもつたふる

をかしさや

みだれてながき

びん
鬢の毛を

つげ
黄楊の小櫛をくしに

かきあげよ

あゝ月つきぐさの

きえぬべき

こひもするとは

たがことば

こひて死なんと

よみいでし

あつきなさは

誰^たがうたぞ

みちのためには

ちをながし

くには死ぬる

をとこあり

治兵衛はいづれ

恋か名か

忠兵衛も名の

ために果^はつ

あゝむかしより

こひ死にし

をとこのありと

しるや君

をんなごころは

いやさらに

ふかきなさけの

こもるかな

小春はこひに

ちをながし

梅川こひの

ために死ぬ

お七はこひの

ために焼け

高尾はこひの

ために果つ

かなしからずや

清姫は

蛇へびとなれるも

こひゆゑに

やさしからずや

佐容姫はさよひめ

石となれるも

こひゆゑに

をとこのこひの

たはぶれは

たびにすてゆく

なさけのみ

こひするなかれ

をとめごよ

かなしむなかれ

わがともよ

こひするときと

かなしみと

いづれかながき

いづれみじかき

三 生のあけぼの

草枕

夕波くらく啼^なく千鳥

われは千鳥にあらねども

心の羽^{はね}をうちふりて

さみしきかたに飛べるかな

若き心の一筋^{ひとすぢ}に

なぐさめもなくなげきわび

胸の氷のむすぼれて

とけて涙となりにけり

蘆葉あしはを洗ふ白波の

流れて巖いはを出づること

思ひあまりて草枕

まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の

なきなぐさめを尋ねたづ侘わび

道なき森に分け入りて

などなき道をもとむらん

われもそれかやうれひかや

野末のすゑに山たにかげに谷たにかげ陰かげに

見るよしもなき朝夕の

光もなくて秋暮れぬ

おもひ
想も薄く身も暗く

残れる秋の花を見て

行くへもしらず流れ行く

水に涙の落つるかな

あさぐも
身を朝雲にたとふれば

ゆふべの雲の雨となり

ゆふあめ
身を夕雨にたとふれば

あしたの雨の風となる

されば落葉と身をなして

ひろがへ
風に吹かれて飄り

きくも
朝の黄雲にともなはれ

よる
夜白河を越えてけり

道なき今の身なればか
われは道なき野を慕ひ
思ひ乱れてみちのくの
宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿の宮城野よ

乱れて熱き吾身には

日影も薄く草枯れて

荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は

吹く北風を琴と聴き

悲み深き吾目には

色彩なき石も花と見き

あゝ孤^{ひとり}独^みの悲^{かな}痛^{しき}を

味^{あじ}ひ知^しれる人^{ひと}ならで

誰^{たれ}にかたらん冬^{ふゆ}の日^ひの

かくもわびしき野^ののけしき

都^{みやこ}のかたをながむれば

空^{そら}冬^{ふゆ}雲^{ぐも}に覆^{おほ}はれて

身^みにふりかゝる玉^{たま}霰^{あられ}

袖^{そで}の氷^{こおり}と閉^とぢあへり

みぞれまじりの風^{かぜ}勁^{つよ}く

小^こ川^{がわ}の水^{みづ}の薄^{うす}氷^{こおり}

氷^{こおり}のしたに音^ねするは

流^{なが}れて海^{うみ}に行く水^{みづ}か

な
啼いて羽風もたのもしく

雲に隠るゝかさゝぎよ

光もうすき寒空の

なれ
汝も荒れたる野にむせぶ

涙も凍る冬の日の

光もなくて暮れ行けば

人めも草も枯れはてて

ひとりさまよふ吾身かな

かなしや酔ふて行く人の

踏めばくづるゝ霜柱

なにを酔ひ泣く忍び音に

声もあはれのその歌は

うれしや物の音を弾ねきて

野末をかよふ人の子よ

声調しつぺひく手も凍りはて

なに門かどづけの身の果はてぞ

やさしや年もうら若く

まだ初恋のまじりなく

手に手をとりにて行く人よ

なにを隠るゝその姿

野のさみしさに堪へかねて

霜と霜との枯草の

道なき道をふみわけて

きたれば寒し冬の海

朝は海^{うみ}辺^への石の上に

こしうちかけてふるさとの

都のかたを望めども

おとなふものは濤^{なみ}ばかり

暮はさみしき荒^{あらい}磯^その

潮^{うしほ}を染めし砂に伏し

日の入るかたをながむれど

湧^わきくるものは涙のみ

さみしいかなや荒波の

岩^{くだ}に砕けて散れるとき

かなしいかなや冬の日の

潮^{うしほ}とともに帰るとき

誰か波路を望み見て

そのふるさとを慕はざる

誰か潮の行くを見て

この人の世を惜まざる

暦もあらぬ荒磯の

砂路にひとりさまよへば

みぞれまじりの雨雲の

落ちて潮となりにけり

遠く湧きくる海の音

慣れてさみしき吾耳に

怪しやもるゝものの音は

まだうらわかき野路の鳥

嗚呼^あめづらしのしらべぞと

声のゆくへをたづぬれば

緑の羽^{はね}もまだ弱き

それも初音^{はつねうぐひす}か鶯の

春きにけらし春よ春

まだ白雪の積れども

若菜の萌^もえて色青き

こゝちこそすれ砂の上^へに

春きにけらし春よ春

うれしや風に送られて

きたるらしとや思へばか

梅^{うめ}が香^かぞする海^{うみ}の辺^へに

磯辺に高き大巖おほいはの

うへにのぼりてながむれば

春しのめやきぬらん東雲しのめの

潮しほの音ね遠き朝ぼらけ

春

一 たれかおもはむ

たれかおもはむうぐひす鶯の

涙もこほる冬ふゆの日に

若き命は春の夜の

花はなにうつろふ夢まの間と

あゝよしさらば美酒うまぎけに
うたひあかさん春の夜を

梅のにほひにめぐりあふ

春を思へばひとしれず

からくれなるのかほばせに

流れてあつきなみだかな

あゝよしさらば花影に

うたひあかさん春の夜を

わがみひとつもわすられて

おもひわづらふこゝろだに

春のすがたをとめくれば

たもとにほふ梅の花

あゝよしさらば琴ことの音ねに

うたひあかさん春の夜を

二 あけぼの

く
れな
る
紅細くたなびけたる

雲とならばやあけぼのの

雲とならばや

やみを出でては光ある

空とならばやあけぼのの

空とならばや

春の光を彩れる

水とならばやあけぼのの

水とならばや

鳩はとに履ふまれてやはらかき
草とならばやあけほのの

草とならばや

三 春は来ぬ

春はきぬ

春はきぬ

初音はつねやさしきうぐひすよ

こぞに別離わかれを告げよかし

谷間に残る白雪よ

葬りかくせ去歳こぞの冬

春はきぬ

春はきぬ

さみしくさむくことばなく
 まづしくくらくひかりなく
 みにくくおもくちからなく
 かなしき冬よ行きねかし

春はきぬ

春はきぬ

浅みどりなる新草よ
にひぐさ
 とほき野面のもせを画えがけかし
 さきては紅あかき春花はるばなよ
 樹きぎ々の梢こすゑを染めよかし

春はきぬ

春はきぬ

霞かすみよ雲ゆるよ動きいで

氷れる空をあたくめよ

花かの香かおくる春風よ

眠れる山を吹きさませ

春はきぬ

春はきぬ

春をよせくる朝あさ汐しほよ

蘆あしの枯かれ葉はを洗せんひ去され

霞あせに酔ひなへる雛なづる鶴つるよ

若わかきあしたの空に飛とべ

春はきぬ

春はきぬ

うれひの芹せりの根を絶たえて

氷れるなみだ今いづこ
つもれる雪の消えうせて
けふの若菜と萌えよかし

四 眠れる春よ

ねむれる春ようらわかき
かたちをかくすことなかれ
たれこめてのみけふの日を
なべてのひとのすぐすまに
さめての春のすがたこそ
また夢のまの風情なれ

ねむげの春よさめよ春
さかしきひとのみぎるまに

若紫の朝霞

かすみの袖をみにまとへ
そで
 はつねうれしきうぐひすの
 鳥のしらべをうたへかし

ねむげの春よさめよ春
 ふゆのこほりにむすぼれし
 ふるきゆめちをさめいでて
 やなぎのいとのみだれがみ
 うめのはなぐしさしそへて
 びんのみだれをかきあげよ

ねむげの春よさめよ春
 あゆめばたにの早さわらびの
 したもえいそぐな汝があしを

かたくもあげよあゆめ春
たえなるはるのいきを吹き
こぞめの梅の香にほへ

五 うてや鼓

うてや鼓つづみの春の音

雪にうもるゝ冬の日の

かなしき夢はとぎされて

世は春の日とかはりけり

ひけばこぞめの春霞

かすみの幕をひきとちて

花と花とをぬふ糸は

けさもえいでしあをやなぎ

霞のまくをひきあけて

春をうかゞふことなかれ

はなさきにはふ蔭をこそ

春の台うてなといふべけれ

小蝶こちようよ花にたはぶれて

優しき夢をみては舞ひ

酔ゑふて羽袖はそでもひらくと

はるの姿をまひねかし

緑のはねのうぐひすよ

梅の花笠ぬひそへて

ゆめ静しづかなるはるの日の

しらべを高く歌へかし

小詩

くめどつきせぬ

わかみづを

きみとくまゝし

かのいづみ

かわきもしらぬ

わかみづを

きみとのまゝし

かのいづみ

かのわかみづと

みをなして

はるのこゝろに
わきいでん

かのわかみづと
みをなして
きみとながれん
花のかげ

明星

浮べる雲と身をなして
あしたの空^{そら}に出でざれば
などしるらめや明星の
光の色のくれなるを

朝うしほの潮と身をなして

流れて海に出でざれば

などしるらめや明星の

清すみて哀かなしききらめきを

なにかこひしきあかほし暁星の

空むなしき天あまの戸を出でて

深くも遠きほとりより

人の世きた近く来るとは

潮うしほの朝のあさみどり

水みな底そこ深き白石を

星の光に透すかし見て

朝よほひの齡を数ふべし

野の鳥ぞ啼く山河も

ゆふべの夢をさめいでて

細く棚引くしのゝめの

姿をうつす朝ぼらけ

小夜には小夜のしらべあり

朝には朝の音もあれど

星の光の糸の緒に

あしたの琴は静なり

まだうら若き朝の空

きらめきわたる星のうち

いとく若き光をば

名けましかば明星と

潮音

わきてながるゝ
やほじほの
そこにいざよふ
うみの琴
しらべもふかし
もゝかはの
よろづのなみを
よびあつめ
ときみちくれば
うらゝかに
とほくきこゆる
はるのしほのね

醉歌

旅と旅との君や我

君と我とのなかなれば

酔たもとふて袂うたぐさの歌草を

醒さめての君に見せばやな

若き命も過ぎぬ間まに

樂しき春は老いやすし

誰たが身にもてる宝たからぞや

君くれなるのかほばせは

君がまなこに涙あり

君が眉まゆには憂愁うれひあり

堅かたく結べるその口に

それ声も無きなげきあり

名もなき道を説とくなかれ

名もなき旅を行くなかれ

甲斐かひなきことをなげくより

来きたりて美うまき酒に泣け

光もあらぬ春の日の

独りさみしきものぐるひ

悲しき味の世の智恵に

老いにけらしな旅人よ

心の春の燭ともしび火びに

若き命を照らし見よ

さくまを待たで花散らば

哀かなしからずや君が身は

わきめもふらで急ぎ行く

君の行衛ゆくへはいづこぞや

ことはなさけ
琴花酒のあるものを

とゞまりたまへ旅人よ

二つの声

朝

たれか聞くらん朝ねむりの声

眠と夢を破りいで

彩あやなす雲にうちのりて

よろづの鳥に歌はれつ

天のかなたにあらはれて

東の空に光あり

そこに時ときあり始はじめあり

そこに道あり力あり

そこに色ことばあり詞あり

そこに声あり命あり

そこに名ありとうたひつゝ

みそらにあがり地にかけり

のこんの星ともろともに

光のうちに朝ぞ隠るゝ

暮

たれか聞くらん暮の声

霞つばさの翼雲つばさの帯

煙こころもの衣露そでの袖

つかれてなやむあらそひを

闇のあなたに投げ入れて

夜の使つかひの蝙蝠かはほりの

飛ぶ間も声のをやみなく

こゝに影あり迷まよひあり

こゝに夢あり眠ねむりあり

こゝに闇あり休息やすみあり

こゝに永ながきあり遠きあり

こゝに死ありとうたひつゝ

草木にいこひ野にあゆみ

かなたに落つる日とともに

色なき闇に暮ぞ隠るゝ

哀歌

中野逍遙をいたむ

『秀才香骨幾人憐、秋入長安夢愴然、琴台旧譜壚前柳、風流銷尽二千年』、これ中野逍遙が秋しゅうえんじゆうぜつ怨えん十絶じゅうぜつの一なり。逍遙字は威卿、小字重太郎、予州宇和島の人なりといふ。文科大学の異材なりしが年わつ僅かに二十七にしてうせぬ。逍遙遺稿正外二篇、みな紅心の余唾にあらざるはなし。左に掲ぐるはかれの清怨を写せしもの、『寄語残月休長嘆、我輩亦是艷生涯』、合せかゝげてこの秀才を追慕するのこゝろをとゞむ。

思君九首

中野逍遙

思君我心傷

思君我容瘁

中夜坐松蔭

露華多似淚

思君我心悄

思君我腸裂

昨夜涕淚流

今朝尽成血

示君錦字詩

寄君鴻文冊

忽覺筆端香

窻外梅花白

為君調綺羅

為君築金屋

中有鴛鴦囡

長春夢百祿

贈君名香篋

忝記韓壽恩

休將秋扇掩

明月照眉痕

贈君雙臂環

寶玉值千金

一鐫不乖約

一題勿變心

訪君過台下

清宵琴響搖

佇門不敢入

恐亂月前調

千里嘯金鶯

春風吹緑野

忽発頭屋桃

似君三両朶

嬌影三分月

芳花一朶梅

渾把花月秀

作君玉膚堆

かなしいかなや流れ行く

水になき名をしるすとして

今はた残る歌反古うたほごの

ながき愁うれひをいかにせむ

かなしいかなやする墨すみの

いろに染めてし花の木

君がしらべの歌の音に

薄き命のひゞきあり

かなしいかなや前まへの世は
みそらにかゝる星の身の
人の命のあさぼらけ
光も見せでうせにしよ

かなしいかなや同じ世に
生れいでたる身を持ちて
友の契ちぎりも結ばずに
君は早くもゆけるかな

すゞしき眼まなこつゆを帯び
葡萄ぶどうのたまとまがふまで
その面影をつたへては

あまりに妬ねたき姿かな

同じ時ときよ世に生れきて

同じいのちのあさぼらけ

君からくれなるの花は散り

われ命あり八重やへむぐら葎

かなしいかなやうるはしく

さきそめにける花を見よ

いかなればかくとゞまらで

待たで散るらんさける間まも

かなしいかなやうるはしき

なさけもこひの花を見よ

いとく清きそのこひは

消ゆとこそ聞けいと早く

君し花とにあらねども

いな花よりもさらに花

君しこひとにあらねども

いなこひよりもさらにこひ

かなしいかなや人の世に

あまりに惜しき才なれば

やまひちりかなしみ
病に塵に悲に

死にまでそしりねたまるゝ

かなしいかなやはたとせの

ことばの海のみなれ棹

磯にくだくる高潮の

うれひの花とちりにけり

かなしいかなや人の世の

きづなも捨てていなな嘶けば

つきせぬ草に秋は来て

声も悲しき天の馬

かなしいかなや音ねを遠み

流るゝ水の岸にさく

ひとつの花に照らされて

ひるがへ飄り行く一葉舟ひとはぶね

四 深林の逍遙、其他

深林の逍遙

力を刻む木匠の

うちふる斧のあとを絶え

春の草花彫刻の

鑿の韻もとゞめじな

いろさま／＼の春の葉に

青一筆の痕もなく

千枝にわかるゝ赤樟も

おのづからなるすがたのみ

檜は荒し杉直し

五葉は黒し椎しひの木の
枝をまじゆる白しろかし樫や
樽あふちは茎をよこたへて
枝と枝ともゆる火の
なかにやさしき若わかかへで楓

山精やまびこ

ひとにしられぬ
たのしみの
ふかきはやしを
たれかする
ひとにしられぬ
はるのひの

かすみのおくを
たれかする

こたま
木精

はなのむらさき
はのみどり
うらわかぐさの
のべのいと

たくみをつくす
おほはた
大機の
をさ
梭のはやしに
きたれかし

山精

かのもえいづる
くさをふみ
かのわきいづる
みづをのみ

かのあたらしき
はなにゑひ
はるのおもひの
なからずや

木精

ふるきころもを

ぬぎすてて

はるのかすみを

まとへかし

なくうぐひすの

ねにいでて

ふかきはやしに

うたへかし

あゆめば蘭らんの花を踏み

ゆけば楊やまもも梅袖に散り

袂たもとにまとふ山葛やまくづの

葛のうら葉をかへしては

女蘿ひかげの蔭のやまいちご

色よき実こそ落ちにけれ

岡やまつゞき隈くまぐま々も

いとなだらかに行き延のびて

ふかきはやしの谷あひに

乱れてにほふふぢばかま

谷に花さき谷にちり

人にしられず朽くつるめり

せまりて暗はげまき峽せまより

やゝひらけたる深山木みやまぎの

春は小枝こえだのたゝずまひ

しげりて広き熊笹くまざさの

葉末をふかくかきわけて

谷のかなたにきて見れば

いづくに行くか滝川よ

声もさびしや白糸しらの

青いき巖いはに流れ落ち

若^{まし}き猿^らのため^にだに
 音^{おと}をと^とむる時^どぞなき

山精

ゆふぐれかよふ

たびびとの

むねのおもひを

たれかする

友にもあらぬ

やまかはの

はるのこゝろを

たれかする

木精

夜をなきあかす
かなしみの
まくらにつたふ
なみだこそ

ふかきはやしの
たにかげの
そこにながるゝ
しづくなれ

山精

鹿はたふるゝ

たびごとに

妻こふこひに

かへるなり

のやまは枯るゝ

たびごとに

ちとせのはるに

かへるなり

木精

ふるきおちばを

やはらかき

青葉のかげに

葬れよ

ふゆのゆめぢを

さめいでて

はるのはやしに

きたれかし

今しもわたる深山みやまかぜ

春はしづかに吹きかよふ

林しょうねの簫の音をきけば

風のしらべにさそはれて

みれどもあかぬ白しろたへ妙たへの

雲はそでの羽袖はそでの深山木の

千枝ちえだにかゝりたちはなれ

わかれ舞ひゆくすがたかな

樹きぎ々をわたりて行く雲の

しばしと見ればあともなき

高き行衛ゆくへにいぎなはれ

千々にめぐれる巖影いはかげの

花にも迷ひ石に倚より

流るゝ水の音をきけば

山は危あやふく石わかれ

削けづりてなせる青巖あをいはに

砕けて落つる飛潭たきみづの

湧きくる波の瀬を早み

花やかにさす春の日の

光燭ひかり照りそふ水けぶり

独こけり苔むす岩を攀よぢ

ふるふあゆみをふみしめて

浮べる雲をうかゞへば

下にとゞろく飛潭たきみづの

澄むいとまなき岩波は
落ちていづくに下るらん

山精

なにをいざよふ

むらさきの

ふかきはやしの

はるがすみ

なにかこひしき

いはかげを

ながれていづる

いづみがは

木精

かくれてうたふ

野の山の

こゑなきこゑを

きくやきみ

つゝむにあまる

はなかげの

水のしらべを

しるやきみ

山精

あゝながれつゝ

こがれつゝ

うつりゆきつゝ

うごきつゝ

あゝめぐりつゝ

かへりつゝ

うちわらひつゝ

むせびつゝ

木精

いまひのひかり

はるがすみ

いまはなぐもり

はるのあめ

あゝあゝはなの

つゆに酔ひ

ふかきはやしに

うたへかし

ゆびをりくればいつたびも

かはれる雲をながむるに

白きは黄なりなにをかも

もつ筆にせむ色彩いろあやの

いつしか淡く茶を帯びて

雲くれなるとかはりけり

あゝゆふまぐれわれひとり

たどる林もひらけきて

いと静かなる湖の

岸辺にさける花躑躅はなつづじ

うき雲ゆけばかげ見えて

水に沈める春の日や

それ紅の色染めてくれなゐ

雲紫となりぬればむらさき

かげさへあかき水鳥の

春のみづうみ岸の草

深き林や花つゝじ

迷ふひとりのわがみだにふかむらさきくれなゐ

深紫の紅の

彩あやにうつろふ夕まぐれ

母を葬るのうた

うき雲はありともわかぬ大空の

月のかげよりふるしぐれかな

きみがはかばに

きゞくあり

きみがはかばに

さかきあり

くさはにつゆは

しげくして

おもからずやは

そのしるし

いつかねむりを

さめいでて

いつかへりこん

わがはよ

紅あから羅ひく子も

ますらをも

みなちりひぢと

なるものを

あゝさめたまふ

ことなかれ

あゝかへりくる

ことなかれ

はるははなさぎ

はなちりて

きみがはかばに

かゝるとも

なつはみだるゝ

ほたるびの

きみがはかばに

とべるとも

あきはさみしき

あきさめの

きみがはかばに

そゝぐとも

ふゆはましるに

ゆきじもの

きみがはかばに

こほるとも

とほきねむりの

ゆめまくら

おそるゝなかれ

わがはゝよ

合唱

一 あんこう
暗香

はるのよはひかりはかりとおもひしを

しろきやうめのさかりなるらむ

姉

わかきいのちの

をしければ

やみにも春の

香かに酔はん

せめてこよひは

さほひめよ

はなさくかげに

うたへかし

妹

そらもゑへりや

はるのよは

ほしもかくれて

みえわかず

よめにもそれと

ほのしろうく

みだれてにほふ

うめのはな

姉

はるのひかりの

こひしさに

かたちをかくす

うぐひすよ

はなさへしるぎ

はるのよの

やみをおそるゝ

ことなかれ

妹

うめをめぐりて

ゆくみづの

やみをながるゝ

せゝらぎや

ゆめもさそはぬ

香^かなりせば

いづれかよるに

にほはまし

姉

こぞのこよひは

わがともの

うすこうばいの

そめごろも

ほかげにうつる

さかづきを

こひのみゑへる

よなりけり

妹

こぞのこよひは

わがともの
なみだをうつす

よのなごり

かげもかなしや

きねがは
木下川に

うれひしづみし

よなりけり

姉

こごのこよひは

わがともの

おもひははるの

よのゆめや

よをうきものに

いでたまふ

ひとめをつゝむ

よなりけり

妹

こぞのこよひは

わがともの

そでのかすみの

はなむしろ

ひくやことのね

たかじほを

うつしあはせし

よなりけり

姉

わがみぎのてに

くらぶれば

やさしきなれが

たなごころ

ふるればいとゞ

やはらかに

もゆるかあつく

おもほゆる

妹

もゆるやいかに

こよひはと

とひたまふこそ

うれしけれ

しりたまはずや

うめがかに

わがうまれてし

はるのよを

二

蓮れんげぶね花舟

しはくもこほるゝつゆははちすはの

うきはにのみもたまりけるかな

姉

あゝはすのはな

はすのはな

かげはみえけり

いけみづに

ひとつのふねに

さをさして

うきはをわけて

こぎいでん

妹

かぜもすゞしや

はがくれに

そこにもしろし

はすのはな

こゝにもあかき

はすばなの

みづしづかなる

いけのおも

姉

はすをやさしみ

はなをとり

そでなひたしそ

いけみづに

ひとめもはぢよ

はなかげに

なれが乳房ちぶさの

あらはるゝ

妹

ふかくもすめる

いけみづの

葉にすれてゆく

みなれざを

なつぐもゆけば

かげみえて

はなよりはなを

わたるらし

姉

はすは
荷葉にうたひ

ふねにのり

はなつみのする

なつのゆめ

はすのはなふね

さをとめて

なにをながむる

そのすがた

妹

なみしづかなる

はなかげに

きみのかたちの

うつるかな

きみのかたちと

なつばなど

いづれうるはし

いづれやさしき

三 葡萄ぶどうの樹きのかげ

はるあきにおもひみたれてわきかねつ

ときたつけつゝうじゑこゝろは

妹

たのしからずや

はなやかに

あきはいりひの

てらすとき

たのしからずや

ぶだうばの

はごしにくもの

かよふとき

姉

やさしからずや

むらさきの

ぶだうのふさの

かゝるとき

やさしからずや

にひぼしの

ぶだうのたまに

うつるとき

妹

かぜはしづかに

そらすみて

あきはたのしき

ゆふまぐれ

いつまでわかき

をとめごの

たのしきゆめの

われらぞや

姉

あきのぶだうの

きのかげの

いかにやさしく

ふかくとも

てにてをとりにて

かげをふむ

なれとわかれて

なにかせむ

妹

げにやかひなき

くりごとも

ぶだうにしかじ

ひとふさの

われにあたへよ

ひとふさを

そこにかゝれる

むらさきの

姉

われをしれかし

えだたかみ

とゞかじものを

かのふさは

はかげのたまに

てはふれて

わがさしぐしの

おちにけるかな

四

たかどの
高樓

わかれゆくひとをしむとこよひより

とほきゆめちにわれやまとはん

妹

とほきわかれに

たへかねて

このたかどのに

のぼるかな

かなしむなかれ

わがあねよ

たびのころもを

とゝのへよ

姉

わかれといへば

むかしより

このひとのよの

つねなるを

ながるゝみづを

ながむれば

ゆめはづかしき

なみだかな

妹

したへるひとの

もとにゆく

きみのうへこそ

たのしけれ

ふゆやまこえて

きみゆかば

なにをひかりの

わがみぞや

姉

あゝはなとりの

いろにつけ

ねにつけわれを

おもへかし

けふわかれては

いつかまた

あひみるまでの

いのちかも

妹

きみがさやけき

めのいろも

きみくれなるの

くちびるも

きみがみどりの

くろかみも

またいつかみん

このわかれ

姉

なれがやさしき

なぐさめも

なれがたのしき

うたごゑも

なれがこゝろの

ことのねも

またいつきかん

このわかれ

妹

きみのゆくべき

やまかはは

おつるなみだに

みえわかず

そでのしぐれの

ふゆのひに

きみにおくらん

はなもがな

姉

そでにおほへる

うるはしき

ながかほばせを

あげよかし

ながくれなるの

かほばせに

ながるゝなみだ

われはぬぐはん

梭をぎ
の音ね

梭の音を聞くべき人は今いづこ

心を糸そにより初めて

涙なみだににじむ木綿もめん縞

やぶれし窓まじに身をなげて

暮れ行く空をながむれば

ねぐらに急ぐ村むらがらす 鴉

連つれにはなれて飛ぶ一羽

あとを慕ふてかあくと

かもめ

波に生れて波に死ぬ

なさけ情の海のかもめどり

恋の激浪おほなみたちさわぎ

夢むすぶべきひまもなし

くらうしほ闇き潮の驚きて

流れて帰るわだつみの

鳥ゆくへの行衛も見えわかぬ

波にうきねのかもめどり

流星

門かどにたち出いでたゞひとり
 人待ち顔のさみしさに
 ゆふべの空をながむれば
 雲の宿りも捨てはてて
 何かこひしき人の世に
 流れて落つる星一つ

君と遊ばん

君と遊ばん夏の夜の
 青葉の影の下すゞみ

短かき夢は結ばずも

せめてこよひは歌へかし

雲となりまた雨となる

昼の愁うれひはたえずとも

星の光をかぞへ見よ

楽たのしみのかず夜よは尽きじ

夢かうつゝか天あまの川がは

星に仮寝の織姫の

ひゞきもすみてこひわたる

梭をさの遠音とほねを聞かめやも

昼の夢

はなたちばな
花 橘そでの袖の香かの

みめうるはしきをとめごは

まひる
真昼に夢を見てしより

さめて忘るゝ夜のならひ

まひる
白日の夢のなぞもかく

忘れがたくはありけるものか

ゆめと知りせばなまなかに

さめざらましを世に出いでて

うらわかぐさのうらわかみ

何をか夢の名残ぞと

問はゞ答へん目さめては

熱き涙のかわく間もなし

男ごころをたとふれば

つよくもくさをふくかぜか

もとよりかぜのみにしあれば

きのふは東けふは西

女ごころをたとふれば

かぜにふかるゝくさなれや

もとよりくさのみにしあれば

きのふは南けふは北

懐古

あま
天の河原かはらにやほよろづ

ちよろづ神のかんつどひ

つどひいませしあめつちの
 始はじめのときを誰たれか知る

それ大神おほがみの天雲あまぐもの

八重かきわけて行くごとく

野の鳥ぞ啼なく東路あづまぢの

碓氷うすひの山にのぼりゆき

日は照らせども影ぞなき

吾妻あがつまはやとこひなきて

熱き涙をそゞぎてし

尊みことの夢は跡も無し

やまと
 大和の国たかいちの高市たかいちの

雷いかづち山ちやまに御幸みゆきして

あまぐも
天雲のへにいほりせる
くるま
御輦のひゞき今いづこ

目をめぐらせばさゞ波や

志賀の都は荒れにしと

むかしを思ふ歌 人の
うたひと

澄める怨をなにかせん
うらみ

春は霞める高台に
かす たかどの

のぼりて見ればけぶり立つ

民のかまどのながめさへ

消えてあとなき雲に入る

冬はしぐるゝ九重の
ここのへ

大宮内のともしびや

さむさは雪に凍る夜の
 竜たつのころもはいろもなし

むかしは遠き船いくさ

人の血潮ちしほの流るとも

今はむなしきわだつみの

まんくとしてきはみなし

むかしはひろき関が原

つるぎに夢を争へど

今は寂さびしき草のみぞ

ばうくとしてはてもなき

われいま今秋の野にいでて

奥おくやま山高くのぼり行き

都のかたを眺むれば

あゝあゝ熱きなみだかな

白壁しろかべ

たれかするらん花ちかき

たかどの高樓われはのぼりゆき

みだれて熱きくるしみを

うつしいでけり白壁に

つば唾にしるせし文字なれば

ひとしれずこそ乾きけれ

あゝあゝ白き白壁に

わがうれひありなみだあり

四つの袖そで

をとこの氣息いきのやはらかき

お夏の髪にかゝるとき

をとこの早きためいきの

霰あられのごとくはしるとき

をとこの熱き手の掌ひらの

お夏の手にも触るゝとき

をとこの涙ながれいで

お夏の袖にかゝるとき

をとこの黒き目のいろの

お夏の胸に映るとき

をとこの紅あかき口唇くちびるの

お夏の口にもゆるるとき

人こそしらねあ嗚呼恋の

ふたりの身より流れいで

げにこがるれど慕へども

やむときもなき清十郎

天馬

序

老おいは若わかは越こしかたに

文ふみに照らせどまれらなる

奇くしきためしは箱根山

弥やよひ生の末のゆふまぐれ

南の天の戸をいでて

よなく北の宿に行く

血の深紅の星の影

かたくななりし男さへ

星の光を眼に見ては

身にふりかゝる凶禍の

天の兆とうたがへり

総鳴に鳴く鶯の

にほひいでたる声をあげ

さへづり狂ふ音をきけば

げにめづらしき春の歌

春を得知らぬ処女さへ

かのうぐひすのひとこゑに

枕の紙のしめりきて

人なつかしきおもひあり

まだ時ならぬ白百合の

籬まがきの陰にさける見て

九十九の翁おきなうつし世の

こゝろの慾の夢を恋ひ

音ねをだにきかぬ雛鶴ひなづるの

軒のきの榎樹えのきに来て鳴けば

寢覚ねぞめの老嫗おうな後の世の

花うてなの台に泣きまどふ

空にかゝれる星のいろ

春さきかへる夏なつはな花や

是これわぎはひにあらずして

よしや兆しるしといへるあり

なにを酔ひ鳴く春鳥はるどりよ

なにを告げくる鶴ねの声

それ鳥うらなの音に卜ひて

よろこびありと祝ふあり

高き聖ひじりのこの村に

声をあげさせたまふらん

世を傾けむ麗人よきひとの

茂れる賤しづの春草はるぐさに

いでたまふかとのゝしれど

誰かにひぼししるらん新星の

まことの北をさししめし

さみしき蘆あしみつゝみの湖の

沈める水に映うつるとき

名もなき賤の片びさし

春の夜風の音を絶え

村の南のかたほとり

その夜生れし牝めの馬は

流るゝ水の藍染あゐぞめの

青毛^{あをげ}やさしき姿なり

北に生れし雄^をの馬の

栗毛にまじる紫は

色あけぼのの春霞

光をまとふ風情^{ふぜい}あり

星のひかりもをさまりて

噂^{うはさ}に残る鶴の音や

啼く鶯に花ちれば

嗚呼この村に生れてし

馬のありとや問ふ人もなし

雄馬^{をうま}

あな天^{あまぐも}雲にともなはれ

緑の髪をうちふるひ

雄馬は人に随したがひて

箱根の嶺みねを下りけり

胸は躡をどりて八百潮の

かの蒼溟わだつみに湧くごとく

喉のどはよせくる春濤はるなみを

飲めども渴かわく風情あり

目はひさかたの朝の星

睫毛まつげは草の浅あさみどり緑

うるほひ光る眼瞳ひとみには

千里ちさとの外もほがらにて

東に照らし西に入る

天つみそらを渡る日の

朝日夕日の行衛ゆくへさへ

雲の絶間に極むらん

二つの耳をたとふれば

いと幽かすかなる朝風に

そよげる草の葉のごとく

蹄ひづめの音をたとふれば

紫金しこんの色のやきがねを

高くも叩たたく響あり

狂へば長たてがみき鬣がみの

うちふりうちふる乱れ髪

燃えてはめぐる血しほの潮の

流れて踊をどる春の海

噴はく紅くれなゐの光には

火炎ほのほの氣息いきもあらだちて

深くも遠いななきき嘶な声なきは

大神おほがみの住む梁うつばりの

塵ちりを動かす力あり

あゝ朝鳥あさとりの音をきゝて

富士の高根の雪に鳴き

夕つげわたる鳥の音に

木曾の御嶽みたけ いはの巖いわを越え

かの青雲あをぐも いななに嘶いなきて

天そらより天そらの電いなづま影まの

光の末に隠るべき

雄馬の身にてありながら

なさけもあつくなつかしき

主人あるじのあとをとめくれれば

箱根も遠し三井寺や

日も暖あたたかに花深く

さゝなみ青き湖の

岸こちの此こち彼草こちを行く

天の雄馬のすがたをば

誰かは思ひ誰か知る

しらずや人の天あまぐも雲もに

歩むためしはあるものを

天馬おの下りて大土おほつちに

歩むためしのなからめや

見よ藤の葉の影深く

岸の若草香かにいでて

春花ちように酔ちようふ蝶ちようの夢

そのかげを履ふむ雄馬おには

一つの紅あかき春花はるはなに

見えざる神やどりの宿やどりあり

一つうつろふ野の色に

つきせぬ天のうれひあり

嗚呼わしたか鷹わしたかの飛ぶ道に

高く懸かれる大空かの

無限むげんの絃つるに触れて鳴り

をがみめがみ たはむ
男神女神に戯れて

照る日の影の雲に鳴き

空に流るゝ満潮を

飲みつくすとも渴くべき

天馬よ汝が身を持ちちて

鳥のきて啼く鳩の海

花 橘の蔭を履む

その姿こそ雄々しけれ

めうま
牝馬

あをなみ
青波深きみづうみの

岸のほとりに生れてし

あづま
天の牝馬は東なる

みちのく
かの陸奥の野に住めり

霞うろほに露うろほひ風に擦すれ

音おともわびしき枯くくさの

すゝき尾花おしなにまねかれて

荒野あれのに嘆なげく牝馬めまかな

誰たれか燕つばめの声を聞きき

たのしきうたを耳みみにして

日も暖ぬくかに花深はなき

西も空そらをば慕ねがはざる

誰たれか秋鳴あきくかりがねの

かなしき歌うたに耳みみたてて

ふるさとさむき遠とほざ天てんの

雲うみの行衛ゆくへを慕ねがはざる

白しろき羚羊ひつじに見みまほしく

透すきては深ふかく柔やはら軟かき

眼まなこの色いろのうるほひは

吾わが古ふる里さとを忍しのべばか
 蹄ひづめも薄うすく肩かた瘦やせて

四よつの脚あしさへ細こりゆき

その鬣たてがみの艶つやなきは

荒あ野れのの空のに嘆なげげばか

春は名な取とりの若わ草くさや

病やめる力ちからに石いしを引ひき

夏は国こく分ぶの嶺みねを越こえ

牝め馬まにあまる塩しほを負おふ

秋は広ひろ瀬せの川かは添ぞひの

紅もみぢ葉ぢの蔭かげにむちうたれ

冬は野の末すえに日ひも暮くれて

みぞれの道みちの泥どろに饑うゆ

鶴つるよみそらの雲くもに飽あき

朝あの霞あせの香かほに酔よひて

春の光の空を飛ぶ

羽翼つばさの色の嫉ねたきかな

獅子ししよさみしき野に隠れ

道なき森に驚きて

あけぼの露にふみ迷ふ

鋭き爪のこひしやな

鹿あきやまよ秋山妻つまごひ恋に

黄葉もみぢのかげを踏みわけて

谷間あへの水に喘あへぎよる

眼睛ひとこみの色のやさしやな

人をつめたくあぢきなく

思いひとりしは幾いくとせ歳せか

命を薄くあさましく

思そひ初そめしは身を責むる

強くびきき軛わに嘆なげき侘わび

花に涙をそゞぐより

悲しいかなや春の野に

湧わける泉を飲み干すも

天の牝馬のかぎりなき

渴ける口をなにかせむ

悲しいかなや行く水の

岸の柳の樹の蔭の

かの新にひぐさ草の多くとも

饑うゑたる喉のどをいかにせむ

身は塵ちりひぢ埃やへむぐらの八重葎

しげれる宿にうまるれど

かなしや地つちの青草は

その慰なぐさめ藉せきにあらじかし

あゝ天あまぐも雲や天雲や

塵ちりの是世このよにこれやこの

轡^{くつわ}も折れよ世も捨てよ

狂ひもいでよ軛^{くびき}さへ

噛み砕けとぞ祈るなる

牝馬のこゝろ哀^{あはれ}なり

尽きせぬ草のありといふ

天つみそらの慕はしや

渴かぬ水の湧くといふ

天の泉のなつかしや

せまき厩^{うまや}を捨てはてて

空を行くべき馬の身の

心ばかりははやれども

病^おみては零^{なみだ}つる泪のみ

草に生れて草に泣く

姿やさしき天の馬

うき世のものにことならで

消ゆる命のもろきかな

散りてはかなき柳葉やなぎはの

そのすがたにも似たりけり

波に消え行く淡雪あはゆきの

そのすがたにも似たりけり

げに世の常の馬ならば

かくばかりなる悲嘆かなしみに

身の苦悶わづらひを恨み侘うらび

声ふりあげて嘶いななかん

乱れて長き鬣いの

この世かの世の別れにも

心ばかりは静和しづかなる

深く悲しき声きけば

あゝ幽遠かすかなる氣息ためいきに

天のうれひを紫の

野末の花に吹き残す

世の名残こそはかなけれ

にはとり
鶏

花によりそふ鶏の

つまめしり かきつばた
夫よ妻鳥よ燕子花

いづれあやめとわきがたく

さも似つかしき風情あり
ふぜい

姿やさしき牝鶏の
めんどり

かたちを恥づるこゝろして

花に隠るゝありさまに

品かはりたる夫鳥や
つまどり

雄々しくたけき雄鷄をんどりの

とさかの色も艶えんにして

黄なる口くちばし 脚あし 蹴けづ 爪め

尾はしだり尾のながくし

問ふても見まし誰たがために

よそほひありく夫つまどり 鳥よ

妻つまも守るためのかざりにと

いひたげなるぞいぢらしき

画にこそかけれ花鳥はなどりの

それにも通ふ一つがひ

霜わびねに侘寝ねの朝ぼらけ

雨に入日の夕まぐれ

空に一つの明星の

闇行く水に動くとき

日を迎へんと鶏の

夜の使よるつかひを音ねにぞ鳴く

露けき朝の明けて行く

空のながめを誰たれか知る

燃ゆるがごとくれなゐき紅あかの

雲のゆくへを誰たれか知る

闇もこれより隣なる

声ふりあげて鳴くときは

ひとの長眠ねむりのみなめざめ

夜は日に通ふ夢まくら

明けはなれたり夜はすでに
 いざ妻鳥つまどりと巢いを出でて
 餌えをあさらんと野に行けば
 あなあやにくのものを見き

見しらぬ鶏とりの音ねも高に
 あしたの空に鳴き渡り
 草かき分けて来るはなぞ
 妻恋つまどりふらしや妻鳥つまどりを

ねたしや露はねに羽はねぬれて
 朝日あさひにうつる影見れば
 雄鶏をとに惜をしき白しろたへ妙たへの
 雲をあざむくばかりなり

力あるらし声たけき
敵かたきのさまを懼おそれてか
声色いろあるさまに羞はぢてかや
妻鳥めどりは花に隠れけり

かくと見るより堪へかねて
背をや高めし夫鳥つまどりは
羽はがきも荒く飛び走り
蹴爪せつに土をかき狂ふ

筆毛ふでげのさきも逆さか立ちて
血潮ちしほにまじる眼のひかり
二つの鶏とりのすがたこそ
是これおそろしき風情ふぜいなれ

妻鳥めどりは花を馳かけ出でて
 争あらそひ鬪分あくるひまもなみ
 たがひに蹴けづめ爪めには
 火焰ほのほもちるとうたがはる

蹴さぐるや左眼さがんの的まとそれて
 羽はねに血ちしほの夫鳥つまどりは
 敵うがの右眼がんをめぐしつゝ
 爪も折れよと蹴返しぬ

蹴られて落つるくれなるの
 血潮の花も地に染みて
 二つの鶏とりの目もくるひ
 たがひにひるむ風情なし

そこに声あり涙あり

争ひ狂ふ四つの羽はね

血潮のりに滑りし夫鳥つまどりの

あな仆たふれけん声高し

一声長く悲鳴して

あとに仆るゝ夫鳥の

羽はねに血潮あけの朱そに染み

あたりにさける花あか紅し

あゝあゝ熱き涙かな

あるに甲斐なき妻鳥は

せめて一声鳴けかすと

屍かばねに嘆くさまあはれ

なにとは知らぬかなしみの

いつか恐怖おそれと変りきて

思ひ乱れて音ねをのみぞ

鳴くや妻鳥めどりの心なく

我を恋ふらし音ねにたてて

姿も色もなつかしき

花のかたちと思ひきや

かなしき敵とならんとは

花にもつるゝ蝶ちようあるを

鳥に縁えにしのなからめや

おそろしきかな其の心

なつかしきかな其なごけの情

紅あけに染そみたる草見れば

鳥の命のもろきかな

火よりも燃ゆる恋見れば

敵てきのこゝろのうれしやな

見よ動きゆく大空の

照る日も雲に薄らぎて

花に色なく風吹けば

野はさびしくも変りけり

かなしこひしの夫つまどり鳥の

冷えまさりゆく其その姿

たよりと思ふ一ふしの

いづれ妻めとり鳥の身の末ぞ

恐怖おそれを抱く母と子が

よりそふごとくかの敵に

なにとはなしに身をよする

妻鳥のこゝろあはれなれ

あないたましのながめかな

さきの樂しき花ちりて

空色ひとはけ暗く一彩毛の

雲にかなしき野のけしき

生きてかへらぬ鳥はいざ

夫つまか妻鳥めどりか燕子かきつばた花

いづれあやめを踏み分けて

野末のすえを帰る二羽ふたはねの鶏とり

松島瑞巖寺すいがんじに遊びぶどう葡萄
 栗鼠きねずみの木彫きを觀くわんて

舟路ふなぢも遠とほし瑞巖寺

冬ふゆ逍遙じょうようのこゝろなく

古き扉ひだに身みをよせて

飛驒たぐみの名匠うきほりの浮彫うきぼりの

葡萄ぶどうのかげかげにきて見みれば

菩提ぼだいの寺てらの冬ふゆの日に

刀かた悲かなしみ鑿の愁みふ

ほられて薄うすき葡萄葉ぶどうばの

影かげにかくるゝ栗鼠きねずみよ

姿すがたばかりは隠かくすとも

かくすよしなし鑿のの香かは

うしほにひゞく磯いそ寺てらの

かねにこの日の暮るゝとも
夕ゆふやみ闇かけてたゝずめば
こひしきやなぞ甚五郎

青空文庫情報

底本：「藤村詩集」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年2月10日発行

1997（平成9）年10月15日55刷

※ルビの一部を新仮名遣いとする扱いは、底本通りにしました。

入力：佐野女子高等学校2-1（H11）

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年5月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

若菜集

島崎藤村

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>